居住空間の風土性(その自然環境と社会環境)を読む

その二(1994年夏　中欧を回って)

デザイン学科　スペースコース
定　松　修　三

目次

研修の目的
研修の意義
行程
はじめに
ドイツの風土について
ドイツにおける家屋の型
南部ドイツの家屋と家並
　南部の野外博物館にて(シュヴァルツヴァルトと高バイエルン)
　南部の街の景観から(ローテンブルクとニュルンベルク)
中部ドイツの家屋と家並
　中部の野外博物館(ヘッセンパークとライン地方)
　中部の街の景観から(コベルンゴンドルフ，ミルテンベルク等)
北部ドイツの家屋と家並
　北部の野外博物館にて(シュレスヴィッヒホルスタイン，キーケベルク)
　北部の街の景観から(シュターデ，ツェレ，ゴスラー等)
ドイツの生活空間の形象の意味
括り(日本の生活空間を省みる)

研修の目的

主としてドイツ北部・中部・南部のそれぞれの主要な野外博物館と主要な街の家並を廻り，伝統的な住まい方とその生活空間のデザインに対する風土的社会的関連をみる。

研修の意義

家屋は生活の視覚的表象物である。従って，その地に至って，家屋，即ち人々の生き方，人となりが表れているものを概観すれば，地域性，民族性あるいは国民性とも読める形象の傾向を知ることができるだろう。また，それら形象の傾向を概括して考察するとき，歴史的経緯や人々の概念の脈絡の上に築かれた本質的なものを推察することも可能だろう。

今日においては，ヨーロッパ空間の形象形成の本質を理解するための，体験に基づいた情報が豊富に得られるようになってきた。しかし，まだ少なからぬ人々は，われわれの近代の生活様式やその空間形成がヨーロッパの形骸化したものを模してきた様態に複雑な問題意識を抱え，それを依然克服できないでいる。形象の中にある意味を消化しきって自己化するには多大の時間と情報が必要なのである。私の中にもまた，そのためのフィジカルな体験を切望するものがあった。われらが進む方向の生活空間の形象の意味と心を構築するため，中央ヨーロッパにおける生活空間の意味，価値を訊ね，足らざる情報を埋めたいという思いを強く持っていたからである。

行程：7月31日～8月5日(FRANKFURT AM MAIN)
　① Freilichtmuseum HESSENPARK
　② Miltenberg の家並
　③ Rothenburg の家屋(職工の家等)
　④ Frankfurt の家屋(Goet の生家等)
8月6日～8月9日(KÖLN)
　① Rheinisches Freilichtmuseum Kommern

② Kobern Gondorf の家並
③ Bonn の家屋（Beethoven の生家等）
8月10日～8月11日（OFFENBURG）
① Schwarzwalder Freilichtmuseums／Gutach
② Freiburg の街並
8月12日～8月14日（MUNCHEN）
① Freilichtmuseum des Bezirks Oberbayernan der Glentleiten
② Nurnberg の家並・家屋（Dürer の家等）
③ Regensburg の家並
8月15日～8月17日（ÅRHUS）
① Freilichtmuseum Den gamle By
② Århus の家並
8月18日～8月22日（HAMBURG）
① Schleswig-Holstein Freilichtmuseum
② Freilichtmuseum am Kjekeberg
③ Stade の家並
④ Lüneburg の家並
⑤ Hamburg の家並と家屋（Kleimar の家等）
8月23日～8月25日（HANNOVER）
① Braunschweig の家並
② Celle の家並
③ Hameln の家並
④ Goslar の家並
8月26日～8月27日（FRANKFURT）
① Darmstadt の郊外住宅

はじめに

当報告は1994年夏休暇中の研修の機会を得て，上記のような行程でドイツの伝統的家屋と都市を巡り，標題の如く，生活空間の風土性を見聞学習，かつ思考し，その折のメモをまとめたものである。

帰国してメモを見直すと，見聞に追われ，いかに考えることの少なかったかを気付くに至った。多くの日本人ツーリストのように，いささか過密なスケジュールをこなしてきたからである。しかし，胸底に沈んでいるものは多くある。それらはこの先，生活空間のデザインを考えるときには，記憶の多くが反芻され，私の思考を深めてくれるに違いない。

さて風土的関連性に思いが及ぶとき，私がまわることができた西よりのドイツを，私は南部，中部，北部と大まかに区分した。これは地理学等の示すいわゆるドイツ南部，中部，北部の区域に必ずしも即していない。私の頭の中では山岳地帯に近い南部，海に近い北部，その間の区域を中部としてみる区分が自然にできてしまった。この無造作な区域把握は家屋の形象の地域性を掌握することには都合よかった。従って，そうした枠組みで風土や地域都市の様子，家屋等を記し，考察の一端をまとめた。

ドイツの風土について

ドイツはヨーロッパの，およそ北欧・中欧・南欧との区分で称されるところの中欧に属する。北緯でいえば47°～55°であるから，わが国よりは遥か北位にある。にもかかわらず気候は冷帯だけでなく，温帯の様子を含んでいるような湿潤地帯ととれる。もっとも，一体にドイツを概観して描かれたものには，暗く荒い北海，屹立する山並，深い黒い森といった厳しくて緊張を強いられる風土のイメージが与えられている。

しかし，古代から引きずってきた，そのような「反地中海気候的」と言われている気候風土観には大きな歪みがあるように思われる。

ドイツの国土を東西に分ければ西には海洋性気候温暖の傾向，東には大陸性気候の厳しさがある。南北でその差をみようとすると北は海洋性気候，南は山岳高地の気候に覆われ，即ち，気候は南北逆転の感がある。故に，全体は大きな差異を表さず，それなりに豊潤な気候にみえるのであろう。

この総体としての気候風土には河川の恵みが大きく影響している。河川は，いずれも南方の山地から北西に向けて，豊かな水を流し続ける。

バルト海に至るオーデル川はポーランドとの国境に沿い流れる。北海に出るエルベ川はハンブルクを，ヴェーゼル川はブレーメンを，ライン川はボン，ケルン，デュセルドルフを通りオランダへ抜けていく。

ライン高地はその豊さが農業ばかりか主要な工業を発展させ，ライン低地はケルンを中心として，これも農業，工業の主要地域となっている。

ヴェーゼル川とエルベ川にはさまれたニーダザクセンとヘッセン地方はヴェーゼル山地の林業，牧畜，農業に支えられ，また，世界の商工業都市の顔を持つハノーファのように，そのほかにも，それぞれの特性を持った都市が多く存在する。

ヘッセンの低地帯は農業と森林，牧場の代名詞となる恵まれた地域である。

北海沿岸地域はハンブルク，ブレーメンという重要な貿易港都市が支えてきた。西寄り中央のマイン川がライン川に合流していく地点には，フランクフルトを中心とする発達した交通網で結ばれた商工都市が多くあり，そのマイン川流域，フランケン地方は耕地に覆われ，ニュルンベルクを中心に農，林，商，工の発展著しい地域であると言えるだろう。

南東のシュヴァルツヴァルトからヴォージュ山脈の間，ライン川上流は温暖な気候地帯で，林業と家内工業，また農牧までの豊潤な地帯を形成する。ネカール川流域，シュヴァーベン地方は耕地，牧草地が主だがシュトウツガルトでは工業を抱え，バイエルン高原へとつなぐ。バイエルンではアルプスの水力で近代工業を興し，ミュンヘンはその中心都市なのである。また今度は，遥かに飛んで北方を見れば，ユトラント半島のシュレスヴィヒ・ホルシュタイン地方がある。氷河堆積の跡を残すやや恵まれない地であるが，よく開墾され現在では農牧地，酪農地域である。但し，この地の核になっている都市キールは良港と工業が主となる。

今回の調査域は，より東部の大陸性気候の厳しい区域を除き，ざっと以上のような比較的恵まれた風土背景におさまる。もちろん，わが国よりはるか北域であるから，夏季は日も長い。しかし当然のことながら，冬季は夜が長くなり，しかもその冬の期間は長く，暗く，重い季節として生活を脅かす状態になる。

そのため，ドイツの人々は陽射しを好み，夏期の日光浴を楽しむ気分が強いこと，イタリアを憧れの地と見ることなど，北欧の人々とさして変わらぬ様子もあるのだ。

私は当初，そのような風聞と情景に接し，ドイツ全体を概括して，しかるべき予断の効く範囲の調査に取り組めると考えていたが，実際のところ，ドイツの生活風土には東西南北，その諸条件を容易にはくくりきれない様相があることに思い致さざるを得なかった。従って，調査はまず大まかな地域的区分をして進めていくことにした訳である。

また，ドイツは中世の都市国家，つまり，各地方の割拠のあとを，うまく残して資産としているところがあり，街々はそれぞれの気風を誇らしげに表出しているが，そうした点からもドイツ全体を一様に概括して済ませられない面がある。家屋等の形象をみようとすれば，気候的変化よりむしろ，地域の都市的，社会的な様相の違いが大きいのではないかと思える面もある。

地方，あるいはその街々はそれぞれの美風を表現し，例えば，調査の対象とする家並や家屋の様相には種族的な属性が表れて，歴史的な経緯の形象が根強く跡を残していると言われることも多かった。

しかし，今日ではそれらもグローバリズムの波に洗われていることは否めない。私の見た限りでは，目に見える社会的風潮の一端にも，われわれ日本の国内で地方色が次第に失われつつある様子と変わらぬ状態がありそうなことを窺い知ることができる。なにしろ現代のドイツはわが国にも増して消費経済を盛んにさせ，いわゆる経済的繁栄を謳歌してきた経済大国なのである。ドイツの知識人たちは，ことあるごとに，そうした繁栄の陰に窺うことができる〈見栄と競争に明け暮れる退廃的消費生活〉をゾチアーレス・プレスティージェ（Soziales prastiege／社会的体面）という社会現象として取り上げているようだが，要するに自らの消費行為が目に余る現象なのだ。また，これもヨーロッパの中では特にアメリカナイズされた風俗に，ドイツ固有の精神的，文化的遺産が蝕まれ，失われていくことを嘆く声も少なからずある。確かに，街々にはアメリカの観光客があふれんばか

りに歩き回り，またそれに見合うだけの，いやそれ以上のアメリカのものが氾濫している状況ではある。私から見れば日本よりはよほどましだと思えるのだが，ドイツ的社会風土に沿って見てみると，たしかに眉をひそめる様相はあるように感じられる。

さてしかし，それも世界的風潮というものであり，それでもってドイツ各地の風土色が失われていきつつあるというものではない。

ドイツ社会，ドイツ人には社会的体面を強く意識する気風がある。われわれ日本人の眼から見れば，家屋の様式，飾り立てなどは一定の方向に向かって競い合う，それは一方で社会帰順の心を満たしているように思われる。社会に自己を強く出し，他者にそれを認めてもらう形式ができているようであり，また，それに準拠していなければドイツ市民としてのアイデンティティは保ち難いのであろうと思われる。

そして，そういったドイツらしい気風はかなり頑強で，少々の文化侵略があるとしても，もちろん，なお十分ドイツ，その風土，社会なのである。

ドイツにおける家屋の型

生活空間の考察は，もちろん家屋の外貌，容姿が持つものを観察することから始まる。ドイツの伝統的家屋は半木軸組，つまり，木軸組の間，壁となる部分を石や煉瓦や土や板で充塡する構造の家屋が中心になる。ファッハヴェルク (Fachwerk) と言う。わが国では英語の名称であるハーフティンバー(Half-timber)で呼び慣れているように，イングランドをはじめデンマーク，オーストリア，フランス，オランダ，ベルギー，その他ユーゴスラビアなどまでのヨーロッパでは広範囲にわたる最もポピュラーな家屋構造である。

北欧や北東ヨーロッパ，スラブ地区，アルプスなどの高山地における家屋の主要な木構造は，丸太組積造，いわゆるログハウスで，その家屋構造と比べれば，造形面の自由度は高い。そこで半木軸組の家屋は様々な形式の発展をみる。根底には針葉樹の大木の材が少ない地域であるが故に，地域の材種を用い(柏材など)，他の様々な資材との組合せに知恵をしぼった経緯があった。

半木軸組家屋の木組のパターンは装飾性を伴って様々に展開する。従ってそこには幅広くいろいろな形式，様式が築かれた。中でもドイツの家屋の木組のパターンは英国に多いシンプルな垂直型より，斜材の加わった変化に富んだパターンが多いのである。石組部分とも併合施工される。

様式は渾然としているとしか言いようがないが，ドイツの各地区地域毎に代表的な型があるとされ，およその形式区分があるとされているようだ。

民家の形式も当然ながら，地域性，風土性によって幾つかの基本形があげられている。今度は廻らなかったドイツ国土の東域を除いたところをあげれば，北ドイツの低地ドイツ広土間家屋，中部ドイツのフランケン荘宅，南ドイツのシュヴァルツヴァルト単一家屋，それに同じく南ドイツの高バイエルン単一家屋型があげられる。もちろん，これらは単なる過去の形ではない。

地域風土条件に根ざしている以上，現代生活に脈を持つものである。もちろん，生活の変化は生活空間の変化を促す。そうした点で地域の相互影響もあり，生活空間のデザインは自ずと変化する。街の家屋もまた同じである。

ともかくも，以後，私が研修で回った区域での様態を，いくらもあるであろう誤認を恐れずに，とりあえず，南部・中部・北部と順を追って記していくことにする。

南部ドイツの家屋と家並

○南部の野外博物館にて
(シュヴァルツヴァルトと高バイエルン)

シュヴァルツヴァルト・黒い森と称される標高1500mの山はドイツの南西部にある。ドイツはこの景観の優れた森林が類なく誇りなのだ。南部の地方都市オフェンバーク (Offenburg) の南東の方角にあたる小さな町グータハ (Gutach) からバスで黒い森の山裾に至ると，この地域の農家を集めたシュヴァルツヴァルト野外博物館 (Schwarzwalder Freilicht museums) がある。この地方の大屋根の農

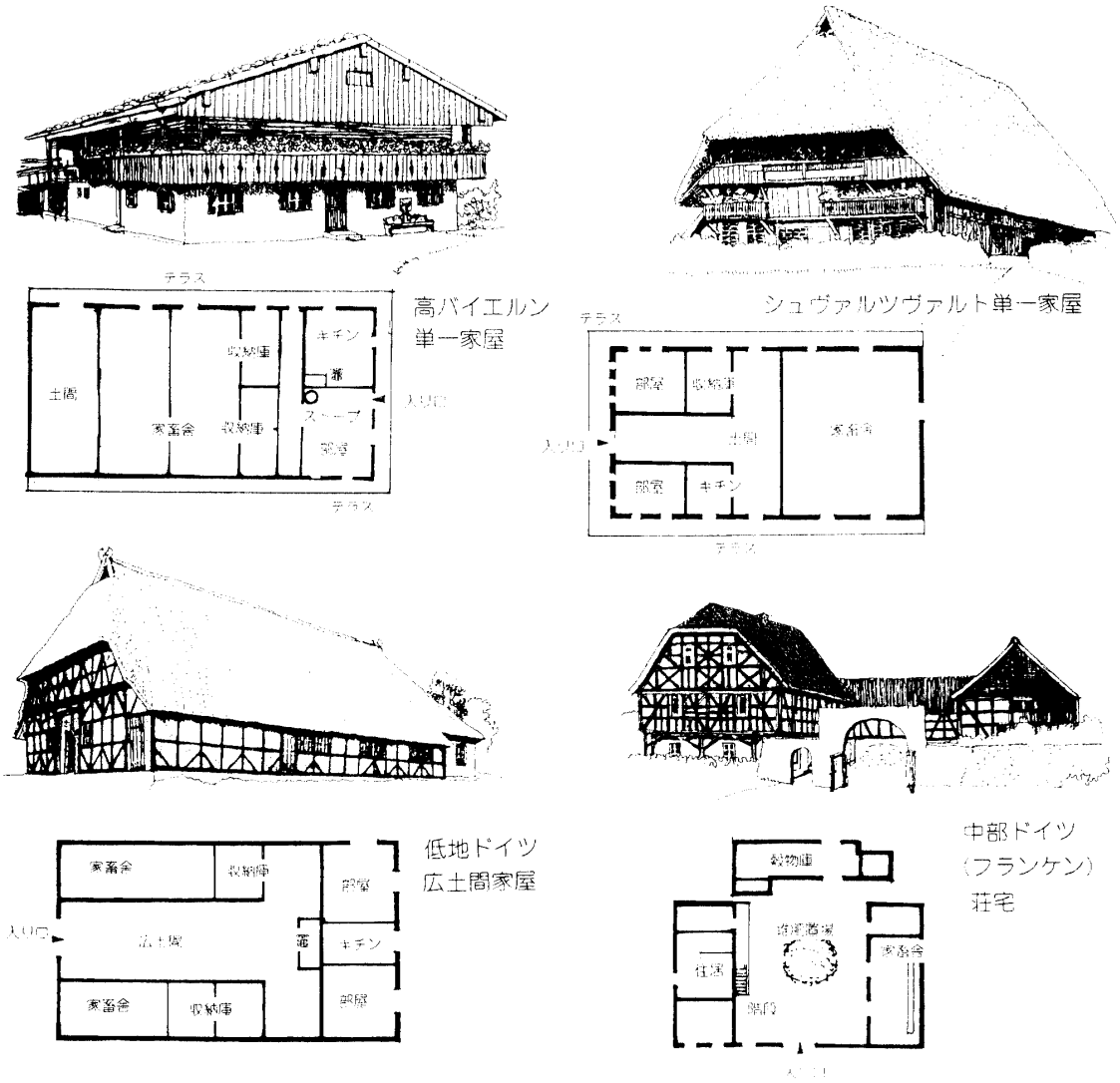

図1　ドイツの主な民家の形（東部を除く）

家を主に展示している。大屋根農家屋は単一家屋階層型と表記されるように，住まい部分はその一部にして，農・畜・その他作業空間を全部ひとつの屋根の各階にまとめた造りである。図1右上図に見るように，これらシュヴァルツヴァルト型の典型は大型の，一風変わった，寄せ棟風の屋根を持ち，1階は家畜舎と，居間・台所，2階は寝室等の居室と乾草置き場，3階は乾草収納に打穀場，機具置き場などで，裏山側斜面路から荷を搬入できるよう大きな戸口の付いた広い屋根裏の作業空間でもある。この1階から3階までの大きな一つ屋根の家屋は，また孤立荘宅とも呼ばれる。ここに保存展示されている家屋の草葺大屋根の姿は，わが国の白川郷の合掌造り家屋にも合通ずる様子をして絵になる風景である。草葺きだけではなく，こけら葺もあり，瓦葺もある。この山間部辺りの，今日建てられる家屋は，今や多くが瓦葺で，地層階，即ち，一階はほとんど石積みないしはレンガ積みというかたちになってきているようである。屋根葺材は変わってきているようだが，それでも平側では一階の上部まで深い軒になる大きな屋根が葺きおろしてきている形や，妻側では寄棟風に

少し葺き下りて，3階の作業室の明かりを採る開口部のやや上あたりから下の方をすっかり切り取ったように見える特異な屋根の形は，今日もほとんど変わっていない。野外博物館では見事に大きな，強い勾配の草葺き屋根が偉容を誇る。低いが奥深いシュヴァルツヴァルトの山を背景に，空にそびえ立つという感覚である。厚い板の外壁，積み上げた薪，また，孤立して農地の真ん中に建てられているためか，畜舎の横には聖者の十字架像を掲げ守りをかため，家屋の傍らに礼拝堂までを築いている家屋もある。厚い信仰に支えられる人々のそれ等の家々はまことに雄々しく強靱な姿である。

図2　家屋の側に設けられたプライヴェートチャペルとその祭壇

1982年に出版された『現代のドイツ－国土と国民』の中の〝地域とその特性〟(H. ヒレンブラント著 山本健児訳)を見ると,「シュワルツワルトの民家は，穀草経営，畜産に役立つもので」,「土地が耕地，採草地，放牧地として順番に利用され」,「畜産は長い間，農家の主要収入源の一つであった」から，この地の気候，多雨，強風，低い気温に抗して大きな防御外壁を要するため，空間を統合し，一つ屋根の下に人間も家畜も住み，収穫物も収容し，農地の真ん中に位置するようにしたのだと言う。垂れ下がった厚い屋根と，風雨の当たる側には枝の繁った樹木を植えて防ぐ形態が生まれた。今もこれら風土の型式が維持されている。かくしてシュヴァルツヴァルトの家屋の型は単一家屋型となったが，しかし，居住部分と家畜小屋部分は壁で区切られ，戸口も別々である。空間は一つに合体しているのだが，居住空間はフス(Hus)，農作業空

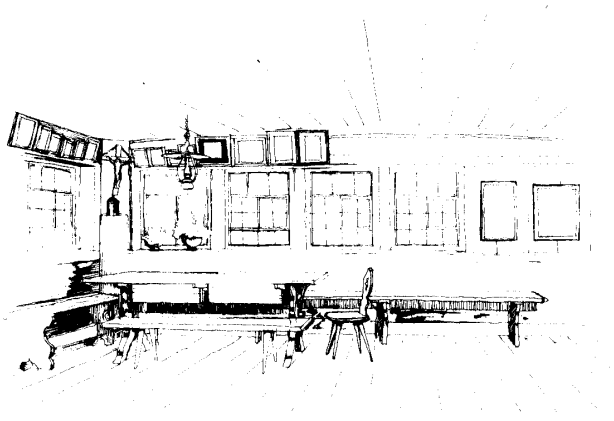

図3　聖なる角座のある居間

間はシュール(Schur)と，意識の上では区分されている。

では，これらの家屋と結び付いた生活習俗，生活空間はどのような様子であろうか，その住まい部分を見てみよう。

一つの典型的な形式は，どの家屋も居間に聖なる角座 (Herrgottswinkel) がしつらえていることである。そこには十字架のキリスト像や聖画像が掲置され，その入隈の角空間に談話や接客のためのテーブルとベンチが配置される。この角隈は一方あるいは二方に窓があり，居室空間の中で最も明るい所で，外部を眺望することができる最良の場なのである。その方をいわゆる上座として見る空間節が意識の上ではあるようだ。

もう一つの典型的な形式は，どの家屋にも入口からまっすぐ廊下型ホールがあって，その入口すぐ近く二階への階段があり，階段を上がると，同じ廊下ホールで，その入口側の面にバルコニーに出る開口部がある。そのバルコニーに面して寝室が並び，バルコニーは部屋から部屋への通路でもあって，二階妻面の端から端まである。屋根の形は先に述べたように，この面は3階の高さから屋根を取り払った形になっているので，バルコニーに面した室内は窓からの陽光でかなり明るい。またバルコニーには，花木のポットを並べ置き，色あざやかな花をいっぱいに咲かせて飾るのである。

ところで，外に向かって花を飾るというような形式は，社会から何らかの働きかけがあるのだろうか，恐らく，家々はこうして「社会の形式」を

遵守する姿勢を見せているのであろう。これはドイツ社会の全国に通ずる習俗パターンととれる。このことはしかし，のちに全体を概観した上であらためてふれることにしたい。

さて，シュヴァルツヴァルトの家屋は，細かくは幾つかのタイプがあるとは言うものの，山間地の家屋らしい特質が空間をして皆同じであるかのようにみせる。例えば，急な梯子階段などで上がる三階は作業や倉庫に使う大きな屋根裏空間である。たいていはその階に大きな開口部，つまり，頑丈な両引き戸が付いた入口が設けられ，そこから馬車等が収穫物などを直接に運び込むことができるようになっている。斜面に建てば裏の道路に開き，道と同じ高さになくても頑強な斜路を築き，馬車等が駆け上がるのである。

乾草は吹抜け部分から下階の乾草置場に落し込み，そこから一階ホールの片側の家畜舎へと配られる。その三階の広い屋根裏空間は，倉庫でもあるから，馬車を始め，橇，脱穀機，耕うん機等がよく手入れをされて納まっている。

一方，その他の納屋に当たるところは，深い軒先や先に述べた三階の屋根裏庫への斜路の下の空間を使う。あるいは住まい部分の天井裏などまで，巧みに空間の空きを使う。また，軒下にも棚を設け農具などを始め色々な資材を収納する。これらの収納状態が作業の程度を示唆しているのは当然で，それらには見て気持ちのよい質の高さがある。ドイツのハウスキーパーは完璧な整理を心掛けると，ものの書に書かれているが，それはすべてに通ずる国民的性格であるように思われる。

さて，これらの居室はどちらかと言えば天井が低い。これまでも保存されているヨーロッパ各地の民家を見てしばしば体験したことなのだが，現在の住民の体形と，ともすれば全く合致しない状態に遭遇する。今回もまた，ドイツ民族は中世あたりは背の低い民族であった等の説があることを聞かされる。それも一面の理解の仕方かもしれない。しかし，私は，寒さの厳しい風土において不必要な天井の高さをとることは，もともと合理的ではなく，木材という材の性質に沿った使用法，構法の面からも低い天井の選択に，それなりの理があったのではないかと思う。日常生活空間より作業空間を優先させなければならない環境条件でもあったであろう。それだけに，その天井をゆるいアーチ状にして（これらの天井は台所などの煙出しのためのアーチ状にしたものとはもちろん違う）少しでも心理的な解放感を得ようとしているような形象に共鳴する。

また，それらの居室の壁は丁寧に縁材で押えた板張りの仕上げが多いが，そうではない荒板や塗り壁の部屋だと精神的な温もりが感じられないのである。このように手を尽くしたものに傾倒する感覚は，深い森の，少しばかり湿度も高い，豊かな自然に包まれた風土の生活空間だからであろう。

さて，同じドイツ南部ではあるが東方の高バイエルン野外博物館(Freilichtmuseum des Bezirks Oberbayern)に見る民家は大きく様相を異にする。この地方では，どちらかと言えば木材を交互に積み上げる組積構造が多いのである。ただし，木材は丸太ではなく角材なので，北欧の丸太組積造の民家とは外観の趣が全く違う。屋根は暖い勾配の板葺で，細い棒材で押え，石を乗せている。新しいところではこけら葺か平瓦葺となり，勾配はやや強くなって雪止めが付く。バイエルン固有と説明されている屋根の形，つまり，外壁より広く突き出た平べったい切妻屋根は，軒の深さにおいて日本の家屋に似て親しみが湧く。山岳地帯だけに風雨（雪）に対応したものであろう。図1左上図。

ここに多く展示されている南部バイエルン型の家屋も階層型の単一家屋型で，家の中に畜舎(一階)や，作業場（二階）を持つ大きな家屋が多い。そういった大きな家の一階，例えば三層のうちの下の一層目の階は石積み造りであるものが多く，畜舎と居室を約半々に分け，台所や暖炉付き居間などがその石造り壁の一階にある。そうした家では台所も居間も漆喰などで白く塗り込められ，明るいが少々そっけなく単調な室内仕上げとなる。無装飾という訳でない。時には壁面の上部にステンシルを使って描いた帯状の花柄をぐるっとまわしていたりするところもある。二階の全居室部分の外

を回っているバルコニー型回廊の手すりや袖の部分にも細やかな彫刻や切抜き模様を施していたり，切妻屋根の妻側破風の板（Windbohlen）にも様々な切り抜き型装飾を施していたりもする。もちろん，意識して装飾効果を求めていることは明らかだろう。ファサードにあたる面には，これも他の地方と同様の手法で花をいっぱいに飾ってもいる。しかし，ドイツ国土のやや東寄り地方，特にアルプスに近い高地ということもあって，木材組積構造の家屋が混在する風景は，全体に素朴，さっぱりとした山地風景となるのは否めない。家屋の作り，家具造作，作業具や什器の類，これら全て実質的堅実さに支えられ，高質だが素朴な風景を描き出す。これは生活の味わいが無味乾燥だというのではない。むしろ充実した生活の深みがうかがえるつくりが随所にある。たとえば風通しのよい階上の端の位置に設けられた便所とか，ベランダ風に開いた所に設置した浴槽，洗面設備，等々生活の仕組みが理に適った形をして，いい空間が築かれている。ここはドイツの人々にとっての精神的な支えとなる郷，現代の人々が振り返って，その本質的生活の型を覚り得る地なのではあるまいか。

○南部の街の景観から
（ローテンブルクとニュルンベルク）

続いて南部寄りにある街を通る際に観た町並みを幾つか記してみよう。

バイエルン州はその南端のアルプス山地に至る，ほとんど全域観光の州である。中でもロマンティック街道は，中世の面影を伝える街々をつなぐ観光ルートとして名高い。そのルートの一角，少し北に向かったところに位置する街ローテンブルク（Rothenburg）はおよそ9世紀頃から街の形をなしたと言われ，12世紀には街を囲う城壁が形成され，17世紀頃まで盛えた自由都市である，と解説書にあった。今の姿はこじんまりとまとまった小さな街である。街をぐるりと囲む天蓋回廊付き城壁が連なり，その足元辺りは現在ではほとんど住宅区域と言ってよく，城壁回廊を歩きながら街中を見ると，赤瓦の急勾配の屋根が連なり，いい景観をなしている。

住まいの家屋の外容はこけら葺きの屋根が相当あって，中にはまた，外壁もこけら板で覆った家屋があり，現代の都市環境とはとうてい思えない古き街の姿が演出されているのである。もちろん，窓などは木製枠ながらドイツ全国に通じる「引き倒し兼開き両用」のタイプが納まっているので，室内はモダンなデザインが施されているのは想像に難くない。通りに面した二階ベランダにはペチュニアやゼラニウムなどの紅い花が咲き満ちている。例外はおよそない。新しい建造の気配の残る家屋も，逸脱勝手はない。不自由ではないかと余計な心配が頭をよぎるが，決してそのようなことはない。街のポリシーを支えることは共通の利益なのである。社会帰順は本質的に利を共有するための行動であろう。いくらかの規制はその手続きとしてある。社会が必要もないのに個人のプライバシーに干渉することはあり得ない。そこで，その個人の家屋内の生活空間は大切な自己演出の場となる。わが国の都市の多くは，デザインに関わる規制を持たない。規範とすべきものもない。従って，外形で個性を主張しようとし，見栄を張るが，内部は見せない，見えないことをいいことに，気を使わず放置されたものになりがちである。わが国の居住空間が往々にしてボロ隠し空間になってしまうのは悲しむべきことだ。

その点，ドイツの街々では街区など公共の場におけるデザインはポリシーが明確に通されている。それは半木軸組のパターンや色彩が完全に統一さ

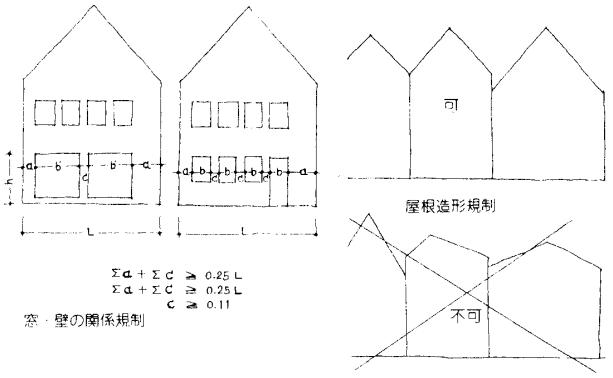

図4　Xanten旧市街の都市造形条例の建物形態規制
（現代のドイツ・国土と国民・4章・都市　から転写）

れるというのではない。それでは面白味は生まれない。方法，システムの共通項が通されるのである。それはゆるやかな枠である。家屋の並びに半木軸組の類似のバリエーションが顔を並べ，華やかなピンクの壁色ときれいなグリーンの壁色が隣り合う，というようなゆるやかな枠がみごとに美しい全体を創り出すのである。そして，屋根の形，瓦材，妻側破風の形，屋根の大きさ，高さ，等々，これらは少しばかり堅く共通の形式が守られる。

もっとも，これらはローテンブルクのみに教えられたことではない。その後，幾つもの，ドイツの南から北までの，多くの街で，溜息とともに，重ねて念を押されるように認識させられ続けたのである。ローテンブルクはまだほんの序の口であった。

さて，グータハの野外博物館を見学した後，私はフライブルク（Freiburg）の町並みをぜひ見ておきたいと思った。石畳の街路と歩道との境をなす浅い溝に山からの清流が流れ続ける街。わが国では島原や大垣のように水のきれいな街と名を取ったところも，もはや昔日の姿はないが，ドイツ南部のこの街では今日なお水で生きた街を保っている。水が流れ続ける大小の路地は結構人通りが多い。幾分の傾斜が付いてなければならぬが，石畳の丸みを帯びた敷石がそれを判らなくさせている。町並みも此処では家屋の姿形よりも，環境保全に多くのことを考えさせる路地に目が行く。それでそこに多くの人がいる。大道芸人も，広場で飲み物を口にしながら談笑に余念のない人達も，子供の足を水に浸けさせている親たちも，ウインドウショッピングで流れをつくる人々も，みな清麗な環境を楽しもうとしているのが分かる。

多くの人は街や人のその様を見て，また心底から心をなごませるのである。

また，高バイエルン野外博物館の後，私はミュンヘンから何とか脚を延ばし，どうしてもニュルンベルクの街を見ておきたかった。ニュルンベルク（Nurnberg）は大戦で完全に破壊され，戦後，戦前のままを復興させたものだという。その忠実に再興された景観は私の目にはもちろん古いままの街としか映らない。城壁と堀に囲まれた比較的大きな街である。城壁の中の街区に中世の雰囲気を伝える町並みがある。街の中心は町中を流れるペグニッツ川と広い大きな石畳の街路，それに古い教会や旧市庁舎などの建物がいい景観をつくる。見晴らしのよいカイザーブルク城に人の流れがあったが，その近くに私の目当てのデューラーの家（Durerhaus）とフェムボーハウス（Fembohaus）がある。

がっちりとした半木軸組のデューラーの家は内部も手の込んだ木の造作で，階段周りと各部屋の扉は古さも手伝い味わい深いものである。およその室内は濃い色調の高い腰板と頑丈な木の天井が重厚な雰囲気を保ち，その間の少し黄ばんだ漆喰の壁と調和している。窓からは城の一部と街の通りが望め，住居内部の暮らしの楽しみがうかがえる。山の手の街の一角，環境のいいところに画匠としての大きな存在が見える。

少し下手に豪商だったというフェムボーの館があり，現在は美術館として建築内部の造りも観賞できるようになっている。バロック時代の，けた外れに豪勢な室内デザインになるこの家屋は，その外観からは想像も付かぬ豪勢な彫刻飾りの天井と壁面でしつらえられ，そういった大きな部屋が二，三階に展開される。明るい色調ながら，木部は全て彫り込まれた見事な装飾で，ただ圧倒されて驚き入るばかりだ。四階はプライベートな空間であったらしく，ここには彫り物はないが，なくても美しい部屋である。この部屋の窓の眺望はすばらしい。市庁舎の大通りがどこまでも望め，川や橋や屋根また屋根が輝いて絵のような風景を見せる。ルネッサンス時代の権勢を持った人たちの生活は現代のそれとは比ぶべくもない至福の時を持ち得たのだと，今更ながら思う。人間は何を追い求めて時の瀬を越えてきたのか，私はしばし複雑な心境に浸らざるを得なかった。

中部ドイツの家屋と家並

○中部の野外博物館にて
（ヘッセンパークとライン地方）

中部ドイツの野外博物館は，交通の便に恵まれないところが多い。ドイツの中で地域的特性から

図5　ヘッセンパークの家屋

商業上の機能を担わされている都市フランクフルト，その西北の小さな地方の町グラフェンヴィスバッハ（Gravenwiesbach）から減多に来ないバスに乗り継ぎ，ヘッセンパーク（Hessenpark）野外博物館を訪ねる。

ここはもちろんヘッセン（Hessen）州の家屋が集められている訳だが，中でもライン川の支流ラーン川，ディル川，オーム川の流域の家屋で構成するランディロム（Lahn－Dill－Ohm）区分が整備されている。切妻の大屋根が多く，その妻側の半木軸組のパターンは比較的シンプルであるが，木軸の材木が太く，強い印象を与える。幾何学的で端正な木組の形は太く黒く，その間の土壁に塗った白や黄色との対比でくっきりと浮かび，集落全体が整然として美しい。その60から70センチ程の比較的狭いピッチの木組の間に窓をきれいに納め，しかも幾何学的な木組のパターンと窓が対称形の家屋の顔形を造っているので，風景はますます整った印象を与える。

これらの家屋にはバルコニーはなく，従って満艦飾の花もない。しかし，よく見ると，時として漆喰壁に手の込んだ絵柄が付けてある。それらの左官の仕事振りは，掘り込み，レリーフ，刻印，転写，その他色々な技法が駆使されているもので，それも展示しているかたちとなっているのである。一方，公共性のある建物には木組に彫刻して文様を付けている。それらは大げさ過ぎる程の芸術的彫刻なのである。このような家屋における表現意欲を見ると，時代や地域で，異なった人の手で，好みのままに生みだされるこうした個人の発意とその美意識は，いつの時代にも素晴らしいものがあることに感嘆する。これらが風潮としてまとまっていくと様式の輪郭が浮上してくるのだろうと想像する。

一方，室内は塗り壁や布張りで仕上げられ，家具はおしなべて素直な形態の実質的なものが多い。これらはその時代背景を考慮しなければならない面があるが，それにかかわらず一貫して見えるのは，この地域の生活風土には華美さがないということである。必要最低限度の飾り立てはなされているが，実質的であり，質を高め，バランスをよく整えているのである。

家屋の型区分は中部ドイツ型の家屋群で，ここの博物館は純粋の農家だけでなく，手工業や商業に関係した町屋型家屋が建ち並んでいる。農家は一側屋敷，二側屋敷，或いは鈎型屋敷，三側屋敷などの型式区分がある。つまり，母屋，第二住宅部分，納屋，家畜小屋など機能別の家屋が庭を囲む分棟型なのである。

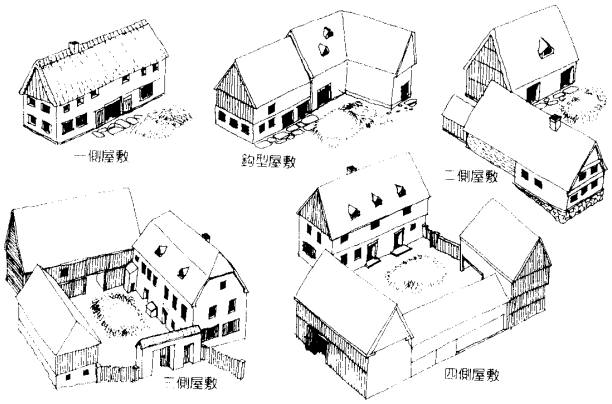

図6　中部ドイツの農家の型

残念ながら，このヘッセンパークではランディローム区域以外ではまだ移設建造中の展示家屋が多く，完全な形で見ることのできるものは少ない。それでも，混在している加工業や商業家屋の外観に，左官などの手の込んだ細部の仕上げが丁寧に

加えられ，その風土性と生活環境をよく理解できる仕組みになっているのであった。

ドイツ中部において予定していたもう一つの野外博物館は，ドイツ中部の西寄りの都市ボン(Bonn)から更に，南西方向をめざしたところのコメルン(Kommern)という町の郊外に設営されているライン地方野外博物館（Rheinisches Freilichtmuseum）である。

ここに展示している農家は母屋と穀倉，納屋，家畜舎が中庭を囲むかたち，いわゆる閉鎖型複合家屋という型が多いようであった。住まいには中庭側から入るが，その中庭に入るために門をくぐる。家屋は草葺き切妻屋根で半木軸組，木組の間は土壁がほとんどで，柳の枝を組み，土を塗り込み，そのまま仕上げるか，漆喰で仕上げる。

半木軸の木組自体はドイツ中部らしく，どちらかと言えば素朴なパターンである。大きな家屋は長屋門があり，多種の作業場を持ち，生活に関わる複合的な技術度の高さを理解することができる。もちろんこれは古き時代のいい形の姿で，現代とはかけ離れている部分も大きい。つまり，現在は家屋も瓦屋根，煉瓦壁，大きな窓，等，風土的特性は幾分薄れていると言われる。しかし，この地の生活習俗としては，今も変わらぬ農業を中心にした生活風俗がはっきりと分かりやすく展示され，基本的には素朴，質素といった基調がよく分かる。

もちろんドイツ中部はこの地だけでなく，全体に派手な見かけのものは少なく，地味，堅実な気風が支配する。そういった感覚は私の心惹かれるところである。それは，農地の景観だけでなく，華やかに化粧されているはずの都市の町並みにも言え，たとえ満艦飾の中でも，私の目は地味で洗練されている基本的な部分を確認し，落ち着きを取り戻す。

○中部の街の景観から（コベルンゴンドルフ，ミルテンブルク，ダルムシュタット）

ドイツ中部ではまず西寄りのケルン(Köln)やボンの街を見歩くことから始める。ボンにはベートーヴェンの生家がある。観光案内書は18世紀の建造物の原型を留めている家と言う。これといって特徴のない，両隣り密接して建ち並ぶ町屋である。後部はのちに継ぎ足して奥に長い間取りとなっている。現在，一階はオフィス仕立てで，見る意味はないが，二，三階の居室造りの様子を見ることができる。ただしそれも，すべての部屋に関係品を展示し，生活感は一切ない。それでも推し量るに，この住まいは，町中の暮らしのさほどゆとりのない生計を立てるに見合う空間であったろう。うしろ半分の，家屋が狭まった分の横に少しと，その背後にも少し庭がある。こうした町屋の様子は東西南北どこの都市でも変わることがない。

ボンの近くのコブレンツ(Koblenz)からローカル線でつながる町，コベルンゴンドルフ（Kobern Gondorf）にはドイツ最古の家と言われる家屋がある。この街は一本の細い旧街道周辺に古い町並みと家屋がそのまま保たれ，何となく懐かしい姿形をしている。その街道から少し山手寄りの通りの辻にドイツで最も古い半木軸組家屋と言われている建物があった。ライン地方半木軸組家屋型だと記録されている説明書には1320～21年に建てられたと記してある。事前に当たっていたところでは農家の一部とばかり思い込んでいたが，目の当たりにすると，外見は集会所のような様子があり，

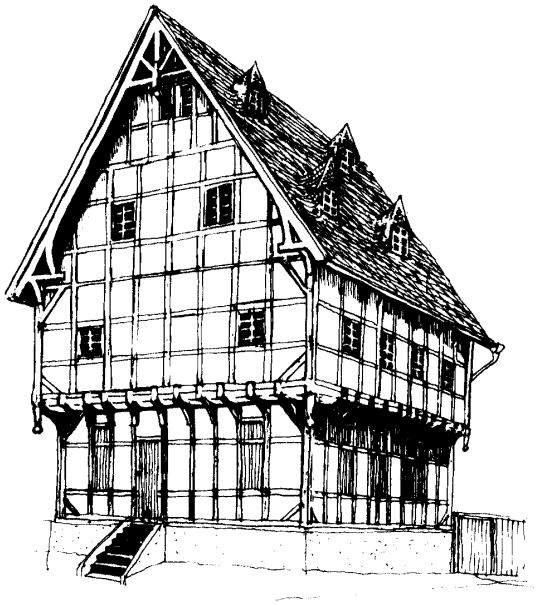

図7　ドイツで最も古い半木軸組家屋

正面に張ってある説明のプレートを見ると，修道院の一部か聖職者の家屋といったものに関係があるらしい。しっかりした造りの半木軸組の大きな建物であった。

あいにく休日で内部に入ることはできない。外形は三層とも四層ともとれる家屋で，二層目でかなり床が迫り出し，それを斜めに突き出す支え木(一種の肘木)が支えている。漆喰塗りの壁はしっかりしていて家屋自体の古さはまったく感じさせない。ただ文献によればこの構造形は古い型なのである。路に面する妻側面にある窓は小さく，しかも後々付け加えられたようにも思える。屋根のドーマーは最初は明らかに無かったものなのだ。いずれにせよ年代の古い家屋であることは間違いないのだろう。初見は外部仕上げが古さを感じさせないので，大いに疑念をもった。そして近くに，見かけではずっと古さを感じさせる，かつて旅籠屋であったという少し傾いた建物を間違いそうになった。こちらは壁の説明プレーとに15世紀のものと記されていた。つまり，これより古い半木軸組の建物であるからこそ，手を入れて形を崩さぬよう保存しているのであろう。

さて，フランクフルトから1.5時間ほど列車をついで行かなければならない，少し不便だが美しい町並みを誇るミルテンベルク（Miltenberg）という街がある。マイン川ほとりのリゾート地である。川辺にはテントがぎっしりと並び，夏休暇の真っ最中であった。川に沿う通りの両側は半木軸組が美しい姿で建ち並び，絵になる景観ではあったが，リゾート休暇の人々が隙無く路を埋めているのは，洋の東西を問わぬ，いずこも変わらぬ風景である。しかしこのミルテンベルクでは伝統的な半木軸組のパターン，いわゆるフランケン外壁といわれるものの中でも特に美しい家屋を見ることができる。フランケン外壁というのは半木軸組の斜め材(筋交いにあたるもの)を曲線にしているものを指している。確かにこの著名な建物のファサードは，工人の仕事とは思えぬ造形的意志が感じられる。この時代の工匠はパターンをどのような手段で推敲し，構成したのであろうか，興味をそそられることである。

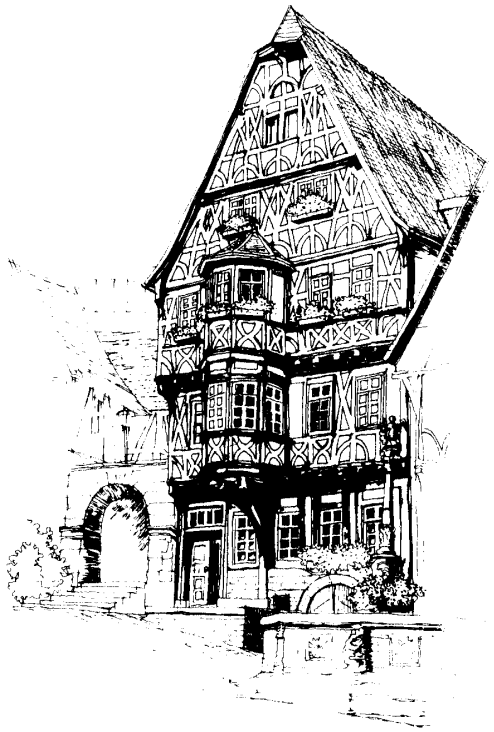

図8　ミルテンベルクの家屋

さて，ミルテンベルクの家屋群はもちろんこのフランケン外壁だけではなく，彫刻飾りを豊満に付けているものもあり，比較的小さい窓の下にポットを取り付け，鮮やかな花をいっぱいに咲かせている家屋も多い。ミルテンベルクという街の人々は，自分たちの街の綽名として知られる「マインツの真珠」という呼び名をこぞって誇っているのである。それがありありと家屋に表れている。

私の調査対象は伝統的な家屋であり，町並みであり，それらの基本的な美意識に基づく形象を追いかけてきた。現代のドイツは，それらの旧市街Altestadtの遺産を大切に保持し，巧みに活用している。各都市自治体の都市造形条例はいずこも，絶対と言うくらいの市民のコンセンサスを得ていて，将来もずっと支持され続けていくのであろう。

また，現代生活を支え現代の生活空間を追求する姿勢もドイツは他のどの国よりも強いと思われる。ドイツの制定する住宅法は世界の先進国の中で，最もきめ細かく行き届いたものだそうである。その姿勢がこのような新旧調和させた環境形成を

支えているのである。

ドイツの人々の住に対する意識の高さは，いろいろな都市において歴史的痕跡をとどめているが，フランクフルトから近いダルムシュタット(Darmstadt)では，マチルダの丘というところに，アールヌーボーの野外博物館と言うべき，一連の建築群がある。即ち，19世紀末，時のヘッセン公国の大公エルンスト・ルードヴィッヒ（Ernst Ludwig）がドイツ各地から芸術家を招き芸術家村をつくった場所である。オルブリッヒ(Olbrich)という建築家を中心にシンボルタワー，美術館をはじめ，芸術家の住まい家屋が建てられ，それらが現在もかなりの数残されている。そういった建築や公園にドイツ，オーストリアを中心にしたいわゆる世紀末の芸術様式であるユーゲントスティールが姿をとどめる。ドイツの世紀末芸術全般は，いささか暗い情念の塊を見ると思えるものが多いが，この芸術家村の家屋は軽快で明るい。達成することのなかった芸術家村計画の全貌は模型で展示しているが，住居建築の芸術性を高めようと取り組んだ理想家達の夢を，充分うかがい知ることができるものである。この一画は短期間に形成されたものであるが，空間が生きものであり，時代の中に生きるものであることを，まざまざと実感させてくれる所である。住まいそのものを考えるとき，古代からつながる人間の生活空間そのものは基本的には変わらないかもしれない。しかし，人の表現，アートは変わる。

故に，過去を安易に葬ってはいけない，此処はよくそれを教えてくれる。

北部ドイツの家屋と家並

○北部の野外博物館にて
（シュレスヴィヒホルシュタインとキーケベルク）

北部ドイツの民家は低地ドイツ広土間家屋と称されるものが多い。幅広の土間，高い屋根，それを支える半木軸組壁，人間と家畜と収穫物を一つ屋根の下に包み，生活も仕事もすべて内部で営む大きな家屋が代表している。その大きな空間の陽光に向かう側に人の居住部分が設けられる。土間は文字通り粘土を固めたものだが，一部に敷石を敷き，古い型のものは囲炉裏のようなかまどを設け，大きな脚のある鉄輪を置き調理もそこでした。居住部分としてはアルコーブベッドや大きなテーブルが並ぶ大まかな空間があって，特にプライバシー空間というものはなかった。このような古い型の家屋も19世紀後半になると独立した小部屋もつくられるようになり，竈も煙突を構えたものになり，ストーブもしくは壁に付く暖炉などの設備も付き，技術も進み，施工材料も多様になり，こうして様々な変化の形を生み出してきたのである。

キール（Kiel）市の郊外に，低地ドイツ型の一タイプ，ザクセン地方のザクセン(Sachsen)型ともう一つのタイプ，フリースラント地域のフリース(Fries)型の，これら両型民家を集めて展示しているシュレスヴィッヒーホルシュタイン野外博物館（Schleswig－Holsteinische Freilichtmuseum）がある。

ザクセン型は一棟の大家屋で，此処にある家屋の一つホルシュタインの（Schipphorstefeld）の民家の場合，屋根は一風変わった入母屋風の寄せ棟ともいうべき草葺き，妻側の面に入り口があるので，その入り口の幅分，もしくは幾つかの窓を含めた幅分，屋根を切り取った形をしている。間取りは広い土間に特徴がある。入り口より中に入ると広土間(Diele)で，その両サイドが家畜舎。広土間の奥正面に囲った竈(炉)があり，その後方奥に居住空間の居間と寝室がある。つまり，広土間の作業空間，屋根裏の乾草等の納屋，家畜舎，住まいを一つ家屋に納める一棟集中型の単一家屋(Einhaus)である。外壁の半木軸の間は素直な積みパターンのレンガ壁で，家屋の姿形は美しい。

フリース型は庭を囲むL字やコの字の数棟家屋でなることが多いが，一棟のものもある。ここにあるEiderstedtのWitzwortの民家（Haubarg）は構造はthe four－post－square barn houseと称すもので，この地域の理由により，少ない材木で大きな空間を造るための構造だと言う。この家屋では中央の空間を囲む周囲空間に住まい，家畜そして脱穀などの作業空間が配される。屋根は大きな草葺き寄棟の一棟型で，外壁は煉瓦積みの半木

図9　フリース型民家（左図）及びザクセン型民家（右図）とその馬の首型破風飾り

軸組であり，内部空間は漆喰の白塗壁で，各居室には黒っぽい大きな家具が置かれていて，あたかもロマネスクかゴシックの時代のような剛直な味わいの雰囲気である。

さてこの野外博物館は，それ以外にも，多様な職種の家屋，学校，大家族の館など半木軸組はもちろん，煉瓦積み家屋の種々の形態を観察することができ，また，時に美しい室内，豪華な調度類を見ることもあって，生活環境を多面的に理解させてくれる内容である。自然景観も美しく整えられ，ドイツの中でも指折りの野外博物館であろう。

北部ドイツではもう一つ，ハンブルク(Hamburg)の南，交通の便は必ずしもよくないのだが，ハーブルク（Harburg）という町の郊外にあるキーケベルク野外博物館（Freilichtmuseum am Kjekeberg）へ向かう。棟数の少ないこじんまりした野外博物館館で，農家の生活の展示が主となる。ザクセン型のうち，大きな家屋は木軸組を煉瓦で詰めた壁だが，小家屋の場合は木軸組を土壁としたものが多く，室内も暗い感じがするのであった。目立った幾棟かの大きな家屋の木軸組は彩色され，派手な装いである。また入り口ドアの上部まぐさには大きく竣工の年月日が彫り込まれ，更にその上部に立つ垂直柱の裾には大きな三角補強板が付き，そこに半円のロゼットパターンが飾り彫りされている。説明をよく見るとsolar ornamentsとあった。太陽を尊ぶ農業の心のシンボルなのであろう。その家屋は広土間奥に周りに河原石を敷いた裸炉がきってあり，大きな五徳ふう鉄製輪が置かれ，火が焚かれていた。竣工年月日を見直してみると1612年とあり，このように18世紀より以前の家屋は広土間の炉は居間，寝室等の居住部分に近いところにあることはあるのだが，オープンな作りだったのである。家の者も就業者も客もその炉端で話を交わしたり，食事をとったりしたと思われる。裸炉から少し離れた窓際に食卓と椅子が置かれていた。居住部分の寝室や個別の部屋は広土間とは壁で明確に仕切られている。その寝室にはたいていは日本の押入ふうのアルコーブベッドが設けられている。これとは別の小さな家屋の場合だと，寝室という閉じた空間は無くて，アルコーブベッドが必要個数設けられているというようなことがあった。つまりそれが寝所なのである。おおかたのベッドそのものは，ゆったり長々と寝られるような大きさはないように思う。昔の人は背と脚を曲げ窮屈に寝たのか，少し背を起こした姿勢で寝たのかもしれない。

このザクセン型つまり，広土間一棟集中型は前記のシュレスヴィッヒーホルスタイン野外博物館とも合わせて最も多くの家屋を見た。従って，地域変化や個性，時代の変遷等に伴うバリエーションを豊富に観たことになる。ここにある大きな家屋では，屋根の妻側破風に煙出しの穴が設けられ，これが屋根の形を一見，入母屋風に見せる。もっ

とも，この煙出しの穴は他の地域の民家型にも付いているようだが，ザクセン型のこの家屋では，その破風穴の上に平板を馬の首型に切り抜いた破風飾り，図9，右下図のように，X状に首を向かい合わせにしたものを掲げている。蛇足ながら，馬の首は向かい合わせの形は幸運を呼び，反対を向いた形は不運を招く意味を持つのである。また，妻側の垂直柱の裾に三角補強板があるのも強い印象を与える。更に，木軸の間のレンガ模様は一段と装飾的であり，強く個性を主張している。

こうした特徴的な外形は，南部のシュヴァルツヴァルトの大きな孤立荘宅が深々とした高屋根の下に聖職者の十字架像を掲げたりしている，あの特有の姿に匹敵する絵画的景観なのであった。

○北部の街の景観から
（シュターデ，ツェレ，ゴスラー，など）

続いて北部の街の幾つかを観て回っていると，半木軸組家屋の垂直柱裾に付けた補強板は，もっと多様に，もっと装飾的に扱われていて，当今の環境芸術にも相当する賑わいなのであった。

さて，ハンブルク（Hamburg）からエルベ川に沿い少し西に向かうとシュターデ(Stade)という街がある。港町らしい雰囲気を残そうとするこの街には，古い商家らしい家屋も残しているという。この街の町並みはどちらかと言えばレンガ壁の彩りが美しく，木組みは単純な構成で白い色が映えたが，その他の彩色を施したものも多い。柱裾の補強板や柱や桁に，多彩な彫刻を施したものもあり，鳥，魚，植物などをシンメトリックな構成の図柄に色を差しているものなど，少し遊び過ぎではないかと思わせる程である。また，二，三，四階と少しずつ迫り出してゆく桁や肘木にも様々な模様を彫り込み，これにもまた美しくペインティングする凝りようは，人々の目を飽きさせない。この街の家並みは道路と平行の，つまり平入り家屋が多く，一部に突き出したアルコーブ型の窓にまるで搭のような屋根を冠したもの，或いは急勾配の大屋根にドーマー屋根を切り妻型に迫り出させて，その破風に，通常の切妻破風に付けるものと同じ鈎と滑車を取り付けたりしている。こうした様子は切妻屋根が建ち並ぶ家並の様子と雰囲気がかなり違ったものになっていると思う。そうした家並の型のパターンの違いは，芦原義信が「建築の輪郭線が都市景観を決定する」と言うことのテクストそのものである。一体に，北部ドイツの街にはこのような平入り型に家屋が並ぶところが多い。平入り型家屋の形とそのシルエットはどちらかと言えば大人しく落ち着いた感じとなる。その代わり，このシュターデの町並みでは，運河沿いに花また花の飾りで，町並みの足もとはこの上なく華やかな装いをまとい，人々をよい気分にさせるのである。

違う姿の街がない訳ではない。北部の都市の中ではハノーファ近くのツェレ(Celle)は少し例外で，その町並みは華やかな妻入りの形が繰り広げられていた。ツェレの主要な通りの家並は半木軸組のパターンの変化と，その木組みに付けられた装飾と，壁の色と，それと上部の階が迫り出していく形，それらが全てリズミカルに街の景観を創り出している。それら家屋と家並の特徴的な諸相の組み合わせが街の個性をつくりだす。こうして見ていくと，ドイツの街々はいずこも個性的な特質を主張している。ツェレだけが個性的な街という訳ではないのである。ハノーファから少し南に下ったゴスラー（Goslar）という街があるが，この街はまた，ここほど個性的な雰囲気を持ったところはないと思わせる。ゴスラーは北部に多い平入りに家屋が並ぶ町並みの典型である。しかし，この街はスレート葺きの屋根や壁面が他に類を見ない独特な雰囲気を見せる。スレートは新しいものは鉛色に光沢を放つのであるが，古びると幾分黄みを帯び，斑な自然色となり，通りの華やかな飾りたてを相殺し，落ちついた静かな雰囲気を創り出す。ドーマー屋根やアルコーブのせりだした屋根部分の，その有機的なつなぎの形を，蛇の鱗のように，舐めるような平滑な仕上げをして，驚嘆させるかと思えば，壁面一面を模様張りと言うか，装飾的に張り込んだ壁がある。この街全体がスレート張りの高度な職人芸の技を競い合っている展示場で

ある。

しかしそれらが創り出す風景は，日本人である私の目には，町並み，家並の様子とも，まるで信州にでも来たのではないかと錯覚を起こさせるほど，粋で渋い情感が漂って見えるのである。流れのきれいな堀割りもあり，背景の山並みもある。ところどころ庭を囲う板塀すら我らが日本の風景に近く，しみじみと懐かしい思いをわかせる。

しかし，また街はドイツそのものでもある。全く違う所を見てみよう。たとえば家屋内の生活は素通りの私には勝手に想像するしかないのだが，その想像の手がかりになるのが窓の様子である。ドイツの窓は内側に引き倒して上部を少し開けるのと，通常の開き扉型に内側へ全開するのとの両機能を一つにしたタイプであるから，通りに面しては引き倒して上部をほんの僅か開けているに過ぎない。しかし，その窓下の内側にいろいろな飾り付けをしているのが見える。その飾り付けは室内の飾り付けとしてではなく，明らかに外向け，通りの人向けに飾り付けているのである。レースのカーテンとガラス戸との間の窓台に，リボンをした花瓶に花，人形，おもしろい手作り手芸品，等々，これらを窓の外，通りに向けて飾っている。通りの人々に見られることを意識している。立ち止まって見ている私がふと気付くと，窓辺に，話しかけたそうに私を見つめている少女の笑顔に出くわすこともある。これは二階の窓外に留めたポットに鮮やかな花をいっぱいに飾りたてる意識と明らかに重なっていると思う。個々の始末としては窓ガラスを通して，部屋の奥に視線の焦点を合わせられるよりも，窓際の飾りに焦点を合わせられる方がよいというような算段もあるだろう。しかし，それよりは街としての，或いは社会としての姿勢がそうした慣習を作らせていることは明らかである。

古き街のたたずまいを愛する意識も，街，或いは自分たちの社会が取るべき姿勢として共通意識が育まれ，そしてそれを全員が遵守するのである。

ドイツの生活空間の形象の意味

ヨーロッパでは，集落の原初形態を思い起こさせるような都市形態を見ることが多い。特に，ドイツでは古い城壁に囲まれた，適切なコミュニティースケールの都市を多く見ることができたが，それらは最初の街づくりの形態がそのまま残されているかのように見えてくるのであった。無理のないコミュニティの集合によって成り立つ小都市はそれ自体，都市の一つの理想である。

ヨーロッパの多くの国のように，各都市に明確なアイデンティティがあり，それら独自の文化を誇る都市が集結して国をなしているというのは，国民にとっても心豊かな状態である。もしその都市が，隅々まで情報が行き届き，市民はみな理想高いコモンセンスを持ち，その人々全員の力を，こぞって活用することができるシステムの小都市（自治体）であれば市民個人にとっては大いなる理想が実現されているものと言わねばならぬ。

ドイツでは各地方の都市がそれぞれ自立しているのである。言語ですらハノーファー辺りを標準語として，他は皆それぞれの地方語だと言う。フランクフルトもボンも地方語なのかといささか驚くと共に，日本と異なって，地方がそれぞれ独立しているという，こうした事情こそ意味があると思えてくる。文化の一極集中は国そのものを単調な顔にしてしまう。ドイツは実に地方の文化の豊穣な国だと言えよう。見聞の報告にも記したように，ドイツでは街の顔をできるだけ個性的に際だたせようとする。人々は自分の関わる街全体がいい顔をしていなければ，自分の顔もよくは見えないことがよく分かっているのだ。全ての人が自分のために全体に尽くす意味を持っている。街は仮住いの地ではなく，しかもすぐ変わってしまう街でもない。自己のアイデンティティをはっきり支えてくれる処なのである。街の形，家々の形はそのために意味を持っている。家々の飾りが街の飾りであり，街のデザインに家々の仕様が取り込まれていくのである。特に，ドイツの各都市の中の旧市街はそれが非常に分かりやすいところだ。

そこから見るところ，ドイツ人は保守的で，伝統派なのである。住まいの調度，用品も年期を重ねたものが尊ばれる。他のヨーロッパの国々同様，全部が骨董趣味を持っているとも言えよう。もちろん，自分の関わる歴史に何等関係のない借り物趣味ではない。もともと，ものを大切にする気持ちから出来る。ドイツ人は大事に取り扱うに足るものを求め，大事に使う。高質高価というムードに引きずられるのではなく，科学的思考に基づく判断であり，選択であるから，ノイエ(neues. 新)もアルテ（altes. 旧）も，その意味では等価なのである。風評にはドイツ人はケチ，質素とある。ドイツ人は皆が皆，適正な量，適正な質の基準を厳正に求め，常にそれと照合する。つまり，科学的な思考をする。限度を越さない，無駄を生まない，つまり，贅沢をしないということが行動の基本になる。面白いのは，住居は身分不相応に，衣服は身分相応に，食事は身分以下で，という信条がドイツ人の中にあるという。そういう信条的ケチであるのかもしれない。ドイツでは衣食住の中で住がもっとも重要視される。住にお金を使うということは，将来の財を築くことを決しておろそかにしないという断固とした意志があるからだと説明される。わが国におけるドイツの評判で筆頭のものは，主婦の家事総合の専門家意識ではないだろうか。それは男女の役割論といった次元で論じられるようなものではない。仕事の達成のために，いかに科学的思考に準拠し，計画し，管理実施するか，その徹底した態度を取り上げたものである。従ってそれは，家事だけでなく，あらゆる仕事の追求の仕方に当てはまる生活態度なのである。好い加減に生きているような姿勢は軽蔑される。教育制度もすべて「達成すること」にかけられ，技術等を達成し得てこそ社会人として迎え入れられる。すべての人がその立場の専門家として社会人たり得るのである。

そのようなドイツの住空間が，基本を外さず，常に質の高さを追求し，いかに優れたものであるか，人間としての基本的生活がいかに充足されたものであるかは，世界の中で名高い評価がある。わが国ではそれに付いて，既に，百言を費やして語られている。1970年代後半の犬養道子の『ラインの河辺』から1983年の八木あき子の『ドイツ婦人の家庭学』まで，多くの人が，引きも切らず，彼の地の生活空間，或いはそのディテールを，われらが住まい空間と比較して，その質の高さを語り尽くしてきている。今更繰り返して語るまでもない。そして，われわれがそのドイツの生活空間から学ぶものは，何も生活空間のデザインの素晴らしさばかりではない。ドイツ人は空間を常に手を加え，住み易さを与え続けるのである。つまり「空間をどう使い生かすか」のソフトこそが重要な鍵となることを正しく理解しておかなければならない。

括り（日本の生活空間を省みる）

わが国の現代の住空間の形は，立式の生活空間が，座式生活空間をはるかに凌ぎ，いつの間にか，洋風仕様の空間となった。それら立式の生活空間，いわゆる洋風空間のルーツは当然ヨーロッパである。つまり，それは北域の生活空間でもある。もちろんこれはわが国では未だいくらも歴史を持っていない。19世紀半ばまでは夏季に照準を当てた南域の生活空間が標準であった。それが180°の向きを変え，北の空間の生活習俗に追随してきた。日本の多くの人が住居維新を希求せざるを得なかったその北の空間は，人間の本性に沿う人間中心の空間と解析したからである。それは生活の近代化に沿って学習し得た知識にのっとった認識であった。

日本の多くの人が北域の，人間を中心に据えた空間に向かった，そのことは，即ち，風土と照合すれば，冬季を照準に合わせて住まいを造営するということである。これまで，それについて学習したことは次のようなことに代表される。つまり，空間内部は生理的にも，心理的にも暖かく造ろうと意図される。もちろん，物理的にも暖かい柔らかい材料は欠かせない。それらをもってそれぞれの目的に添った特別な雰囲気に仕立てられる。木の材種や布生地は重厚な感覚のものが高級視され

る。ヨーロッパの風土の中では，心を温めてなごませる火穂のような局部的あかりが貴重に思われる。人々の仲は緊密に，間を取らぬよう燈火を中にし，皆その火芯に深い精神的効果を求めて止まない。空間そのものは強固で安定した状態にあることを望み，安全の象徴としての鍵を施し，閉じた空間を共有することにおいて更に絆を深める。壁面は人を孤独に陥らせないように，手を尽くした繊細なもの（手芸品とか，絵画，また観賞植物とか）で飾り，いつも心を癒すことを望んでいる。冬は，その長い夜においては，部屋の中では多くのものに囲まれた人がそれらのもの達と一緒に競演するドラマの舞台を創りだすこと，そして空間が生きられた空間となることを願う，と。

おおむねはこのような北域の住まい空間。この基本概念は，その北域の風土を背景とする限り，将来ともその価値が変わることはない。従って，ヨーロッパにおいては，今日の住まい空間も当然ながら抜き差しならぬ伝統をもって存在しているのである。今回の研修で私が確認し得たドイツの家屋も，まさにその正当なテクストとして現出したのであった。

分かり切ったことだが，人間の住空間設営の意図は，第一には厳しい自然環境から身を守ることである。皮膚を曝す人間が，地球環境の厳しい条件のありとあらゆる所に住み着くことができたのも，身を守るに充分な空間を築く能力を持ち得たからに他ならない。人の群は早期から生存不可能な自然環境の地にも居座り，人為的な空間を築いてしのぐ所作をおぼえた。やがて自然の生態系とは着かず離れずの間隔を取りながら，独自の別生態系様のものを構え，群が肥大するままに，自己維持のための小宇宙，つまり街を築き，地上を覆い尽くしてきた。その積極的な姿勢は北の地域ほど強かったに違いない。翻ってわが地を考えると，われらの国土には，それら北と同じような切実な風土条件はなかった。厳密に対比すればそう言うことも許されよう。無いと言い切っては日本の列島北部の人々は承服しないかもしれないが，少なくとも，この国土には冬季型天候はそう長くはない。高温で多湿な夏季の気候と同程度の期を分かち合うに過ぎない。われらが風土の，先に述べたような，人間を中心に据えた，北域の生活空間を設営する根拠，その基本的思考の根幹にある理由は，ヨーロッパ北部，中部とは比較にならぬ程薄弱であることは確かである。それだけに気楽であり，自由であった。そこで，現代のわれわれの住空間は，その僅かの北もどき風土を頼りにして，北域型進路を進み続ける。豊かさを希求し，表象する進路と重なるからである。人々は北域の生活空間の形に憧れ，模倣を続けてきた。もちろん身をもって理解するには難かしく，その必然性もなかった。今日でも日本人はヨーロッパ諸国の人々と生活意識，態度が近似的だと，幾割かの人が錯覚を持っているに過ぎない。あるいはその願望を強く持っている。だが，彼我の風土は大きく隔たり，意識の違いを埋めるにはなお多くの学習が必要であった。

われわれはまだ充分な学習を得ないまま，風土条件，文化的脈絡の合致しないところに，ただ精神的な作為をもって彼地の伝統を勝手につなぎ取ろうとしてきたようである。これまで相当な無理をしてきたのは事実である。

ところで今日の状況を見ると，ようやく，というか，感覚距離が短縮された効果によって，あまり無理でもない状態で，自然に関係が深められていく様子がある。より多くの人がその自然なペースで，彼地の風土の空間とその形象の意味を，深く理解していくことができるような状況ができた。

もちろん，日本の多くの人々は，これまで以上に，精神における北と，風土における南の，その矛盾の中に新しい融合の可能性を模索し続けることだろう。しかし，今後，ヨーロッパを深く理解するに至れば，われわれの心と風土の新しい融合の可能性は，これまでわれわれが選んできたような道，つまり科学技術で不都合な風土性を圧し殺して，ヨーロッパの空間の形象のみを模倣するといったあり方は決してよくないというところに到達するだろう。これまでの方向はあまり賢明ではなかった。われわれの住まい空間は今日，材料も

エネルギーも風土との一体性を失いつつあり，加えて科学技術的なほころびも頻出している。

この自然環境こその全き生活，よき社会環境を築くための生活空間をこそ，学び得なければならないのである。

参　考　文　献

1）杉本尚次「ヨーロッパ民家の民族学的・地理学的研究」国立民族学博物館研究報告5巻2号1980

2）［Bogtsbauernhof in Gutach／The Black-Forest Open Air-Museum］Edm, Von Koning-Verlag, Heidelberg 1986

3）Helmut Keim［FREILIGTMUSEUM Des Bezirks Oberbayern An der Glentleiten］MUSEUMSFUHRER 1990

4）Karl Baeumerth. Eugen Ernst. Rolf Reutter. Werner Nink［FREILIGHTMUSEUM Hessenpark Guid to Region Lahn-Dill-Ohm］1987

5）Guide to the open-air-museum of Schleswig—Holstein

6）Gunther Binding, Udo Mainzer, Anita Wiedenau［Kleine Kunstgeschte des deutschen Fachwerkbaus］Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1989

7）Manfred Gerner［FARBIGES FACHWERK Ausfachung. Putz. Warmedammung. Farbgestaltung］DVA1993

8）Margarete Baur-Heinhold［Alte Bauernstuben］Callwey 1989

9）大西健夫編「現代のドイツ・国土と国民」三修社1982

10）小塩節「ケルンだより」青蛾書房1988

11）広瀬立成「ふだん着のドイツ」文化出版局1982

12）J・P・ヘーベル著有内嘉広訳「ドイツ暦物語」鳥影社1992

13）犬養道子「ラインの河辺」中央公論社1973

14）八木あき子「ドイツ婦人の家庭学」新潮社1983

15）宮下健三「ミュンヘンの世紀末」中央公論社1985

16）小幡一「世紀末のドイツ建築」井上書院1987